

「救いのための代価」

ルカ 15:25-32

【1】失われたもの

ルカ 15 章には主イエスによって 3 つのたとえ話が語られている。①羊、②銀貨、③息子である。この 3 つはどれも失われたものが見つけ出されたという話である。このことよって、神の目から見て失われた人間の姿とそれをご自分のもとに取り戻してくださる神の愛が示されている。特に最後のたとえ話は、失われた二人の息子の話である。著者であるルカは、イエスの話を聞きに来た人々を 2 つのグループに分けて説明している。「取税人、罪人たち」と呼ばれる人々は弟タイプ。「パリサイ人、律法学者」たちは兄タイプと考えられる。彼らはイエスの語られることに対して明らかに異なる反応を示した (15:1, 2)。イエスは弟タイプの罪人と呼ばれる人々だけではなく、優秀な兄タイプの人々もまた神の前には失われたものであり、そのために神は大きな犠牲を払い愛を示されたことを語っているのである。

【2】兄の怒り

いわゆる「放蕩息子」のたとえ話は二部構成となっている。第一幕は弟の反抗と帰還。第二幕は兄の怒りと父のなだめである。この第二幕では父の無償の愛とともに、それにとまなう大きな代償が支払われていることが示される。

弟息子が帰還したとき、兄息子は父に対して怒った。兄の怒りの原因はなんであったのだろうか。29, 30 節によれば、放蕩してきた弟に対して豪華な食事をふるまう、その宴会の費用を考えたことにある。しかし、そこには解決されなければならない兄の心の問

題を見ることが出来る。それは、父との関係である。兄は自分について父親に「仕えてきた (奴隷となった)」というのである。そこまでしてきた自分と放蕩してもなお歓迎される弟と比べ、自己憐憫に陥ったのであろう。

【3】失われた者の姿

兄の姿に失われた者の姿を見ることが出来る。彼は父との関係において自ら壁を作り、自分を正当化していた。父の思いに気づこうとせず、父への愛がなかった。彼は、忠実に父に仕え、戒めを守ることによって父に反抗していたのである。すなわち、自分で自分を正しい者とし、父に反抗しようとしたのである。人の罪とは、戒めを破ることだけではなく、自分自身を救い主、支配者、善悪の審判者として、神の立場に置くということである。兄は自分を自分で義とすることによって、父の愛を退けた。

【4】救いは誰に

このような弟にも兄にも父は愛を示された。神の救いは神の愛を恵みとして受けることよって与えられる。私たちはただ、受けることしかできないのである。父の赦しは息子たちにとって無償のものであった。しかし、そこには多大な父の犠牲がともなっていることを忘れてはならない。兄はその父の犠牲が赦せなかったのである。

神の救いには犠牲がともなっている。神はご自身に逆らった者を罰することをせず、代わりにご自身のひとり子を罰したのである。また、ひとり子であるイエスはこれを良しとし、自らを厭わずに犠牲となられたのである。それは、父の愛と喜びを一つとしていたからである。この愛を忘れてはならない。